

「大腸疾患診断の実際」 Ⅱ腫瘍性疾患・消化管ポリポースシス〈第2版〉

市川平三郎・山田達哉 監修
牛尾恭輔 著

京都第一赤十字病院第2内科部長

多 田 正 大

本書の著者である牛尾恭輔先生と私は同年代の仲間であると共に、氏には一目も二目も置いているライバルでもある。著者は次世代の消化器病学会を担うホープであるが、おそらく消化器病学を専攻する者で牛尾恭輔氏の名前を知らない者はいないであろうし、俊英並びいる国立がんセンターの中でもひとときわ際立つ、市川平三郎、山田達哉門下生の俊才である。著者の卓越した大腸診断理論、それを支える腫瘍学、生物学、科学に対する造詣の深さと学問的展開は常に私達を魅了するところである。中でも癌発生とその成長・増殖についての生物学的立場からの理論は万人をうなずかせる説得力がある。

その牛尾先生が2年前に「大腸疾患診断の実際」上下2巻を刊行した際の快挙に、自分ごとのように喜び胸をときめかせながらインクの香りの新しいページを練ったものであった。その不朽の名著がわずか2年目にして改訂されたとのこと、その理

由を問い質すと、第1にこの書物の評判がよくて早くも第1刷を完売したこと、第2に完全主義者である著者の立場から、単に増刷するだけでなく旧版の気にかかる箇所を訂正すると共に、自らの考え方の進歩を徹底的に加筆したとのこと、何とも羨ましい話であるし、本を造ることに対する真摯な態度に脱帽するばかりである。

さて気にかかる改訂箇所であるが、改訂版ではIIc型表面陥凹型癌、カルチノイド、腫瘍の発育と経過、Cowden病などに一層充実した追加記述がなされており、1989年11月に開かれた消化管ポリポースシスに関する研究会(神戸)のトピックスまでが既に記述され、最新の話題が洩らさず満載されている。挿入症例に対しても細かな配慮でminor changeがなされており、読者にとって一層理解しやすい内容になっている。

何よりも大きな改訂は“人体と腫瘍”に関する項であり、放射線科医

としての立場にとどまらず、病理学者、生物学者、科学者としての幅広い視野に立った腫瘍の発育と増殖に対する洞察が表されている。この項だけでも大変な力作である。ここだけでも小冊子としてまとめてもおかしくない内容であり、腫瘍発生学についての理論展開は高く評価される。既に前著でもこの項は一際光り輝いていたが、恩師白壁彦夫先生の破格の書評(「胃と腸」24巻791頁)の中でも熱く、声高く賞讃されていたので、敢えてここで繰り返すまでもあるまいが、著者の人格と研究熱心さを如実に表す記述であろう。

牛尾先生は国立がんセンターの放射線診断部に籍を置くものの、内視鏡検査にも携わるし内科外来診察も担当するとのこと、センター内の他科の俊英医師との合同カンファレンスでホットな討論を行い、研究会や学会を通じて他施設のパイオニア達との自由闊達な交流の機会も多い。地方に在する私にとっては何とも羨ましいほど恵まれた環境の中にあるが、そのチャンスを確実に活かすことのできる才能を有する科学者であるからこそ、かくも素晴らしい改訂版が完成したものであろう。同世代の研究者の1人として、牛尾恭輔先生の快挙に心からの喝采の言葉を述べると共に、早くも氏の次の研究成果に興味と期待がもたれる。おめでとう。

●A4判 350頁 写真683 原色図373
色図24 1990 定価29,870円(税込)
〒400